

長崎県における農漁村の地域スポーツ

— 本土と辺地の比較

山 内 正 毅

田 井 村 明 博

今 中 国 泰

神 文 雄

（昭和58年4月30日受理）

Community Sports in Farming and Fishing Districts of Nagasaki Prefecture : Comparison between the Mainland and its Islands

Masaki YAMAUCHI, Akihiro TAIMURA, Kuniyasu IMANAKA
and Fumio JIN

I 緒 言

先に、長崎県民のスポーツ活動の普及振興に関する一連の調査研究を実施し、その結果を報告した。^{1,2,3,4,5,6,7,8,9)}そして、この問題に対して、体育・スポーツの側面からだけでなく健康の側面からも同時に、指定市町村制度、個人的諸属性、地域類型といった観点で検討を加え、スポーツ振興政策の具体的展開に当たっての基礎的資料を得ようとした。

本研究は、この一連の研究の中でも、特にスポーツ・余暇活動の側面を更に詳細に考察しようとするものである。これまでに示した研究報告^{2,6,8)}では、多くの検討内容について地域差が認められ、都市部や周辺地域に比べて農漁村地域にスポーツの普及振興についての基礎的段階の問題が残されているように推察された。そこで、今回は農漁村地域に焦点を絞り、本土と辺地を比較検討することを具体的な目的とした。

II 研究 方 法

A 調 査

1. 対象地域

「長崎県体育・スポーツの普及振興に関する長期計画の策定について」¹⁰⁾の地域類型に基づいた農漁村地域で、これを更に本土と辺地に分類した（表1）。

2. 対象者

農漁村（12町）の小学生（5年），中学生（2年）の保護者1,142名（男女各571名）。

3. 期間

昭和53年7月から10月

4. 手続き

質問紙調査法により実施した。質問紙は調査者らが直接学校に持参し，担任教師と児童・生徒を通して保護者に配布，回収した。

表 1 対象地域一覧

農 漁 村 地 域		
本 土		辺 地
鹿 町 町		上 五 島 町
大 瀬 戸 町		巖 原 町
有 家 町		芦 辺 町
田 平 町		新 魚 目 町
野 母 崎 町		豊 玉 町
南 有 馬 町		郷 之 浦 町

B 結果の処理

分析には全調査項目のうち，①スポーツに対する好意度，意欲，関心度について5項目，②スポーツ活動の実施について6項目，③スポーツ活動の実施に関する肯定理由について2項目，④スポーツ活動の実施に関する否定理由について2項目，⑤スポーツ活動に必要な条件について3項目の計18項目をとりあげた。

データは各項目ごとに単純集計し，統計処理（ χ^2 検定）を行った。

III 結果と考察

A スポーツに対する好意度・意欲・関心度

好意度（好き・嫌い）については，男女で多少異なる点はあるが，本土と辺地の間にはほとんど差がなく，「好き」が半数以上，「嫌い」は10%未満，残りが「どちらでもない」であった。しかし，実際にスポーツを行うことについての好意度となると（図1），女子に本土・辺

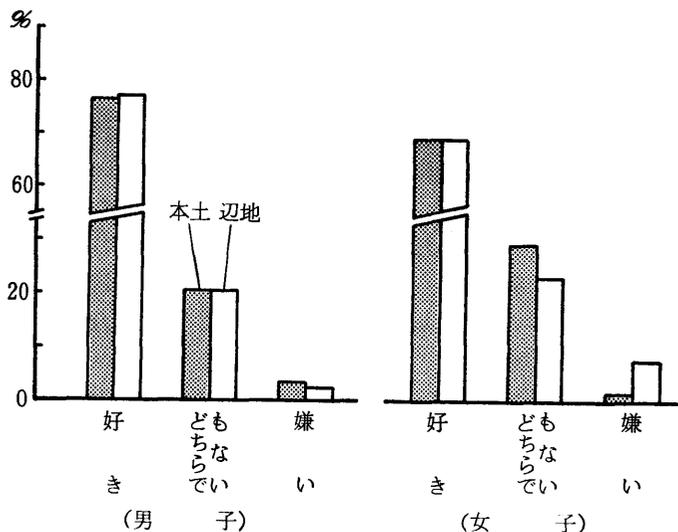


図1 スポーツの好き・嫌い（好意度）

地の差がみられ，「嫌い」と回答した者の比率において辺地が本土を上まわっている（ $\chi^2=7.177$, $df=2$, $p<0.05$ ）。

今後への意欲（今後スポーツをしたいかどうか）については（図2），男子には本土と辺地の差異が認められないものの，女子では辺地の方が本土よりもやや消極的である。

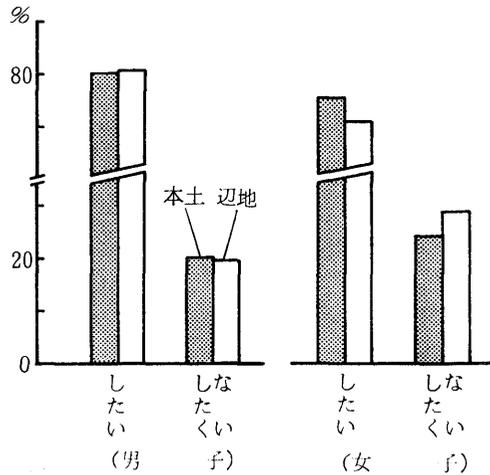


図2 今後スポーツをしたいか(今後への意欲)

関心度については、「地域スポーツの振興についての意見」および「スポーツ振興指定市町村である(ない)を知っているか」のふたつの質問項目の回答内容から、間接的にみることにした。前者の項目(図3)については、全体的には本土・辺地ともに「スポーツの普及をはかる

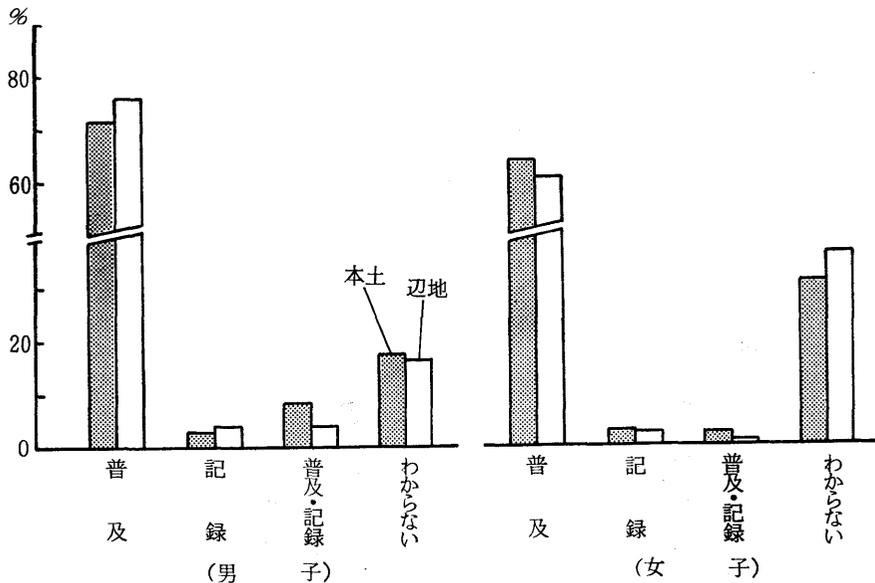


図3 地域スポーツ振興についての意見

べきだ」に意見が集約されているが、この中で「わからない」と回答した無関心とも受けとれる層が、辺地の女子に若干多いことが認められる。また、後者(図4)についてみると、本土・辺地ともに「知らない」が高率であるが、男女いづれも辺地の方が多少高い率を示している。

以上の結果から、本土と辺地の地域住民のスポーツに対する好意度・意欲・関心度を比較すると、本土よりも辺地の方が、わずかではあるが、スポーツに対する消極性・無関心といった態度が強いものと考えられる。それは、特に女子に強調されよう。

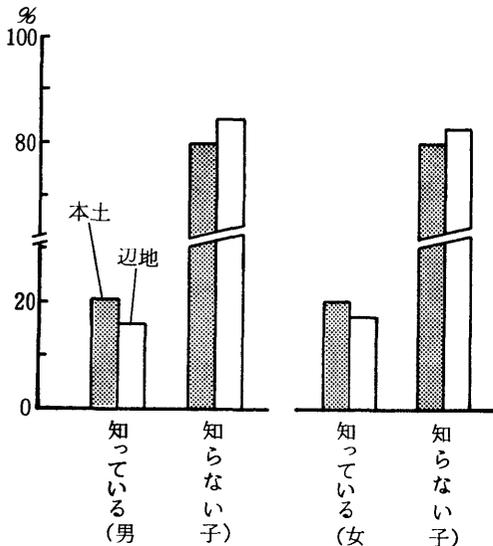


図4 指定町村である(ない)ことを知っているか

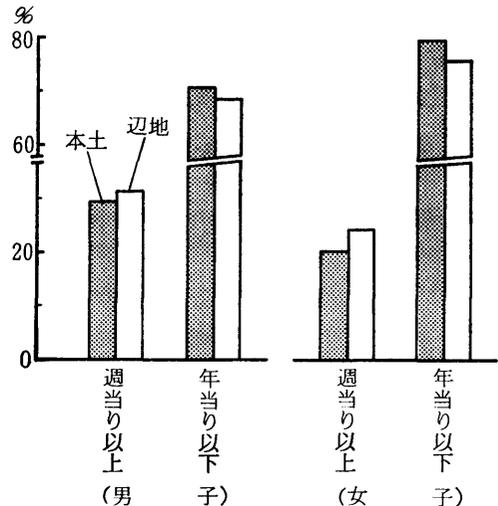


図5 スポーツの実施程度

B スポーツ活動の実施

スポーツ活動の実施程度について、「週に2〜3回」あるいは「2週に2〜3回」と回答した者を「週当り以上」, 「年に1〜2回」以下を「年当り以下」として集計したものが図5である。「週当り以上」において、男女ともに辺地の方がやや高率ではあるが、有意な差は認められなかった。1回のスポーツ活動の実施時間については、本土・辺地ともに30分程度以下の者が男子で55〜59%, 女子で約60%, また大会や行事への参加率でも男子約53%, 女子約44%であり、本土と辺地の差異はほとんどみられない。

スポーツ活動を実施する際の形態(仲間等)については、男女ともに本土と辺地の差異がある程度みられ、特に女子の場合、統計的にも有意な差($\chi^2=8.913$, $df=3$, $p<0.05$)が認められた。図6に示したように、男子の場合は「個人的レベル」(「家族と一緒に」・「近所の人と」

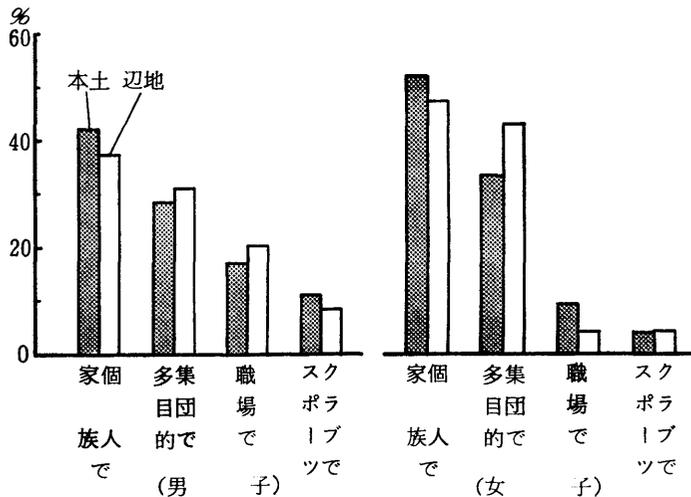


図6 スポーツの実施形態(仲間)

・「個人的に」)および「クラブレベル」(「スポーツクラブで」)の比率では本土の方が、「多目的集団」(「地区や部落の一員として」・「青年団や婦人会の一員として」・「P.T.A.の一員として」)および「職場」の比率では辺地の方が、それぞれ高い比率を示している。女子の場合「職場」の比率が男子と逆の傾向を示しているが、「個人的レベル」、「多目的集団」では男子と同傾向であり、特に「多目的集団」については本土33.8%、辺地43.1%と顕著な差がみられる。「クラブレベル」でのスポーツ活動に関連するスポーツクラブへの入会状況は(図7)、本土・辺地とも低率ではあるが、男子の場合本土21.4%、辺地14.0%で本土の方が高い比率を示しており、統計的にも有意な差($\chi^2=4.616$, $df=1$, $p<0.05$)が認められた。

次にスポーツ活動の実施形態(仲間)に関連して、スポーツを行う場所についてみると(図8)、男子では、「学校以外の公共施設」(本土:16.5%、辺地:8.0%)や「家の庭や周辺」(本土:26.1%、辺地:23.5%)で行う者の比率は本土が高く、「学校」(本土:27.2%、辺地:34.0%)および「道路や空地」(本土:11.4%、辺地:15.0%)で行う者は辺地の方が高い傾向を示している。女子の場合、「家の庭や

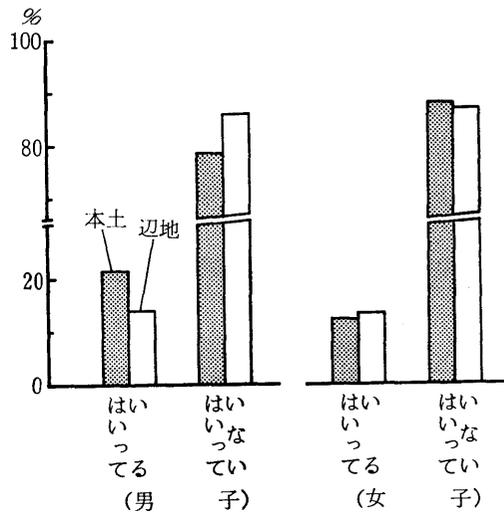


図7 スポーツクラブ加入状況

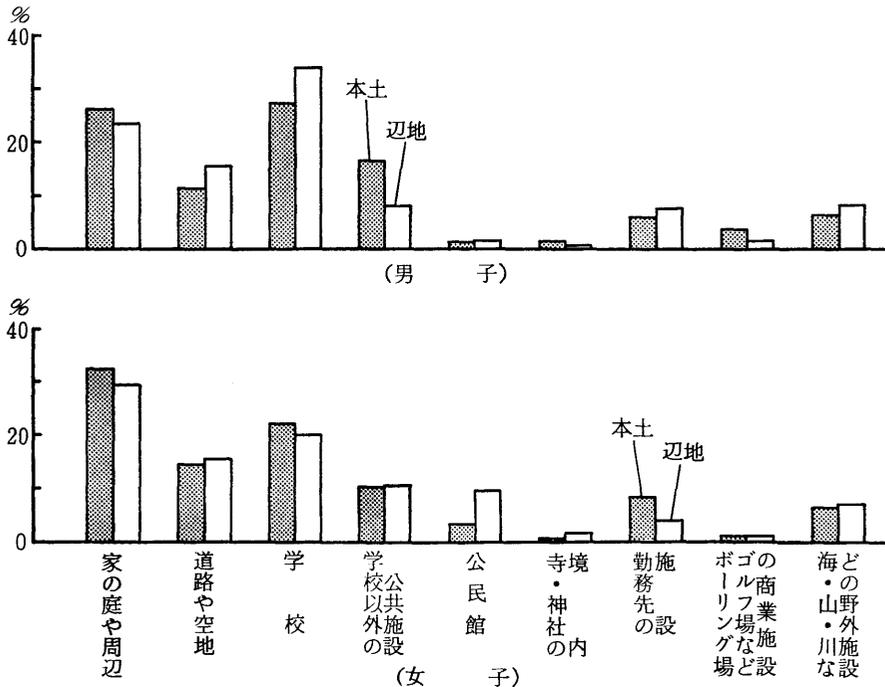


図8 スポーツの実施場所

周辺」・「学校」・「道路や空地」でわずかな差がみられるが、むしろ「公民館」・「勤務先」の比率における本土と辺地の差異が顕著であり、「公民館」では辺地が本土を上まわり、「勤務先」では逆に本土の方が高率を示している。

以上の結果から、スポーツ活動の実施における実施程度や大会・行事への参加率等を“量的側面”とし、それに関連する仲間や実施場所等をスポーツ活動実施の“質的側面”としてとらえれば、本土と辺地の差異は“量的側面”よりも“質的側面”にあり、本土が個人的レベルでの実施形態であるのに対して、辺地では近隣社会の“多目的集団”を中心とした実施形態であることが考えられる。

C スポーツ活動の実施に関する肯定理由

スポーツをする理由については本土と辺地の差はほとんどなく、男女ともに「体力を養う」と「健康」が60~70%、ついで「楽しみ・気晴らし」が20~30%、「仲間づくり」10%未満、「勝利・記録」はわずかに1%であった。しかし、スポーツの大会・行事参加理由(図9)には本土と辺地の差異が若干認められる。

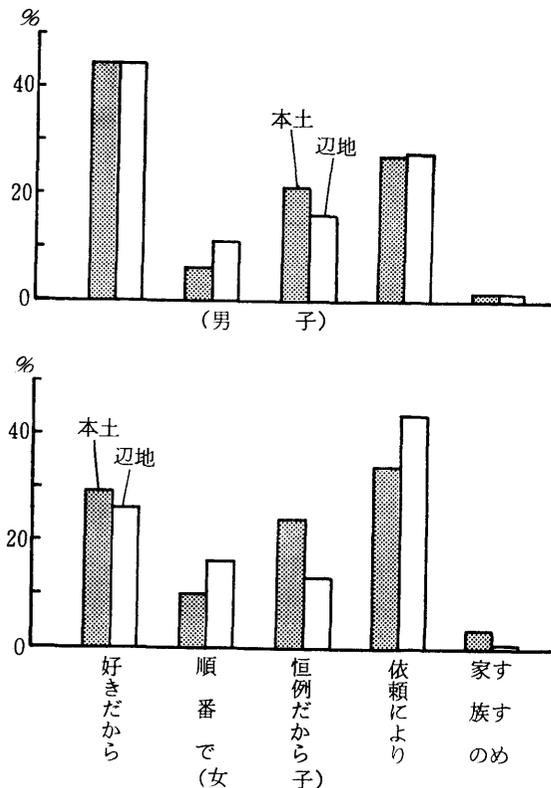


図9 大会・行事の参加理由

には本土と辺地の差異が若干認められる。確かに、本土・辺地いずれも主たる理由には「好きだから」と「人の依頼」があげられ、ついで「恒例」・「順番」・「家族のすすめ」となっているが、それらの本土と辺地の率に多少の特徴がみられる。男子の場合、「恒例」の大会・行事であることを理由とする者の比率が本土で高く、「順番」については辺地が本土を上まわっている。女子の場合にも同傾向がみられるが、それに加えて、「好きだから」・「家族のすすめ」では本土が辺地を上まわり、「人の依頼」では逆に辺地がかなりの高率を示している。

これらの結果からすると、“スポーツそのものをする”ことについての理由では本土・辺地の違いはみられないわけだが、それが大会・行事の形態をとる場合には、若干の差異が生じてくると考えることができる。その差異は、特に女子に顕著であり、本土の主体的・積極的参加に対して、辺地では「好きだから」といった本人の主体性に基づく参加よりも、「人の依頼」にみられるような消極性が表面化していると推察されよう。

「好きだから」といった本人の主体性に基づく参加よりも、「人の依頼」にみられるような消極性が表面化していると推察されよう。

D スポーツ活動の実施に関する否定理由

スポーツをしない理由については(図10)、本土・辺地の差異が男女いずれにも顕著に認められた($p < 0.05$)。“個人的理由”(「病弱・体力不足」・「嫌い」・「へた」)では、男女によって本土・辺地間の傾向が異なり、その差もあまり顕著ではない。しかし、“生活のゆと

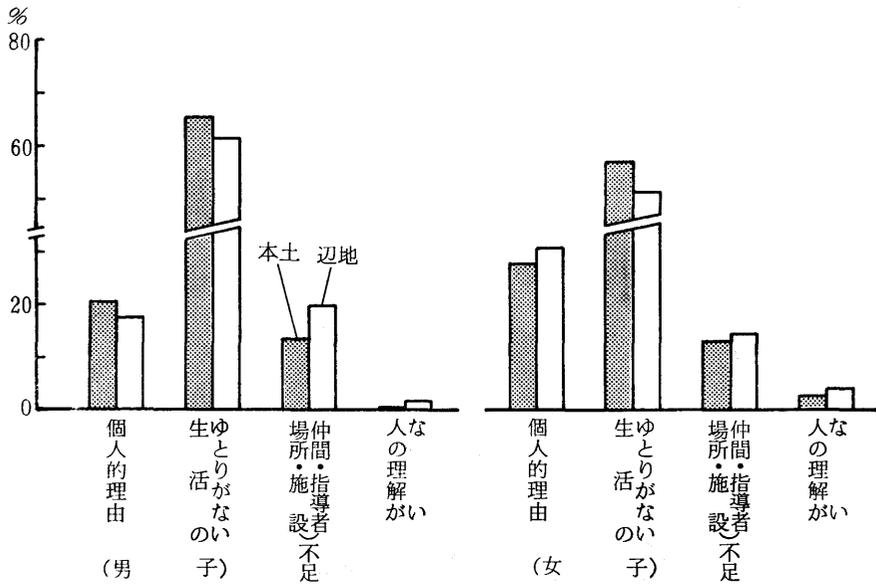


図10 スポーツをしない理由

り”（「暇がない」・「仕事づかれ」等）では本土が辺地を上まわり、「条件整備」（「施設」・「指導者」・「仲間」不足）では辺地が本土よりも高率を示している。「人の理解がない」でも辺地の方が若干高くなっている。一方、大会・行事の不参加理由（図11）をみると、やはり

「生活のゆとり」における本土の高率がめだつが、それに加えて、「家族の反対」があるために参加しないケースが辺地の女子に特異的に認められる。以上みてきたように、本土では「生活のゆとり」がないこと、また辺地では「条件整備」が充実していないこと、がスポーツ活動に参加しない理由の大きな特徴として指摘することができる。さらに加えれば、「人や家族の理解」がないことも、特に、辺地の女子については見逃せない点と思われる。

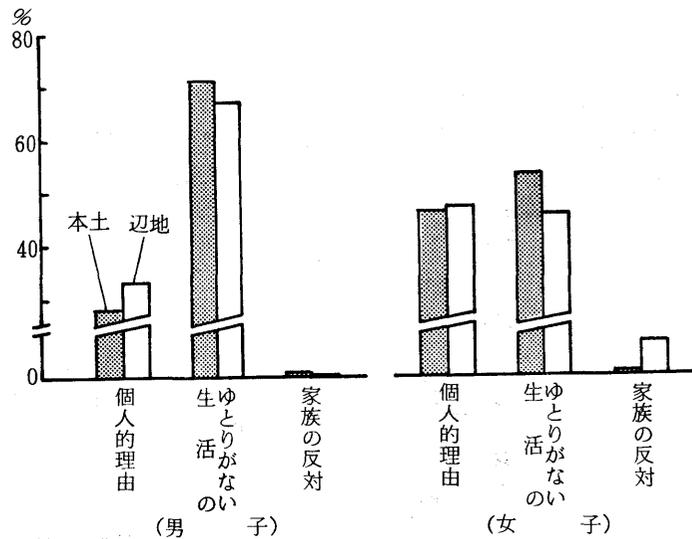


図11 大会・行事の不参加理由

E スポーツ活動に必要な条件

スポーツ活動を行うために必要なことを、個人的条件としての「生活のゆとり」と「条件整備」（「場所・施設」・「行事」・「指導者」・「仲間」）の両側面からみると（図12）、その相対的比重が本土と辺地では若干異なることが認められる。すなわち、「暇」を中心とする「生活のゆとり」では本土が辺地を上まわり、「条件整備」（特に「場所・施設」・「行事」）

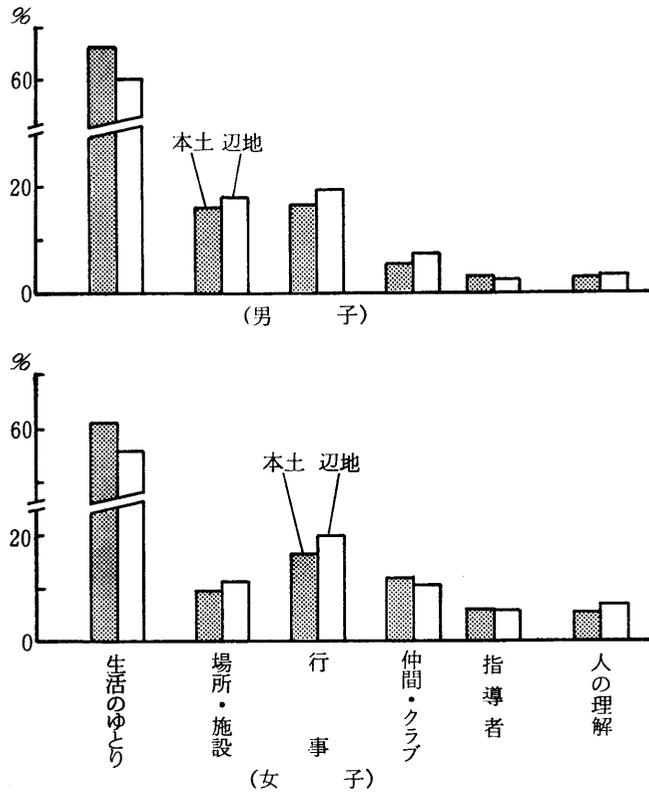


図12 スポーツを行うために必要なこと

では辺地がより高率を示している。また、「人の理解」についても、若干ではあるものの辺地の方が高く、特に女子がこれを必要条件としてとりあげている。さらに、地域スポーツ振興に必要なこと(図13)についても同様の傾向が示されている。

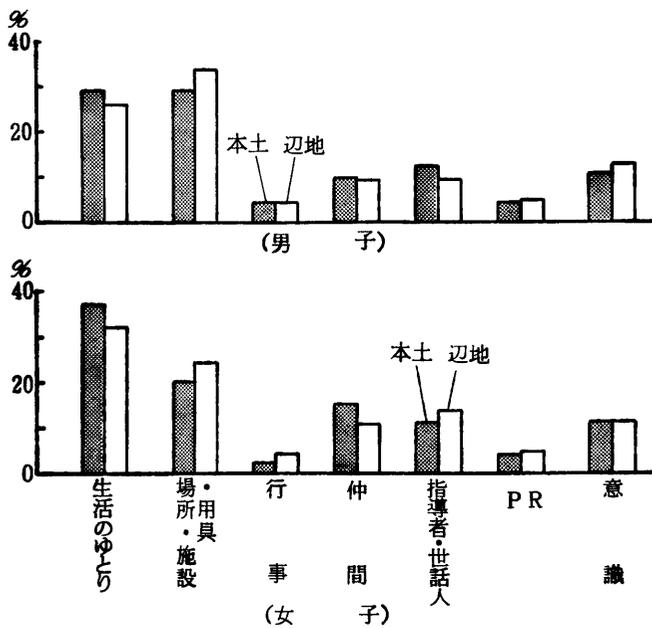


図13 地域スポーツの普及振興に必要なこと

ここで、「条件整備」の「場所・施設」の問題に関連して、学校開放に関する地域住民の意見（図14）を検討してみると、「賛成」・「反対」のいずれも本土が辺地を上まわり、逆に、辺地では「別の施設」の設置を望む意見が高くなっている。

また、「条件整備」の「指導者」をさらに掘り下げて検討してみると（図15），本土・辺地いずれも、技術面の指導者と世話役としての指導者の比率には大差ないが、世話役としての指導者に何を望んでいるかについては、本土・辺地の傾向がそれぞれ逆転していることがわかる。すなわち、「施設の世話」では辺地が、「グループの面倒」では本土がそれぞれ他方を上まわっている。以上の結果からみると、本土では「生活のゆとり」（特に時間的ゆとり），辺地では場所・施設

を中心とする「条件整備」が、それぞれの地域におけるスポーツ活動をより充実させるために必要な条件として浮びあがってこよう。

IV ま と め

これまでの行政体の推進するスポーツ普及振興策は、各種の外的条件整備と住民の意識の啓発という内的条件整備が中心となっていた。その結果、国レベルについてみると、施設数や国民のスポーツ実施度は増え、意識についてもかなりの変化がみられるようになったといえよう。

本研究では、長崎県でも特に、農漁村地域のみをとりあげ、その本土対辺地という比較を行ったわけであるが、運動実施頻度からみた運動量については、本土と辺地間に大きな差異はみられなかった。しかしながら、表面的な運動量は同じであっても、それを支える各種条件については、内容的に異なる傾向がみられた。

まず、外的な条件からみると、本土では運動場所として「学校以外の公共施設」・「職場」・「家の庭や周辺」などを利用し、個人的レベルあるいは職場レベルでの活動が行われている。一方辺地では、「学校」・「公民館」・「道路や空地」などで、その地区や部落の一員として青

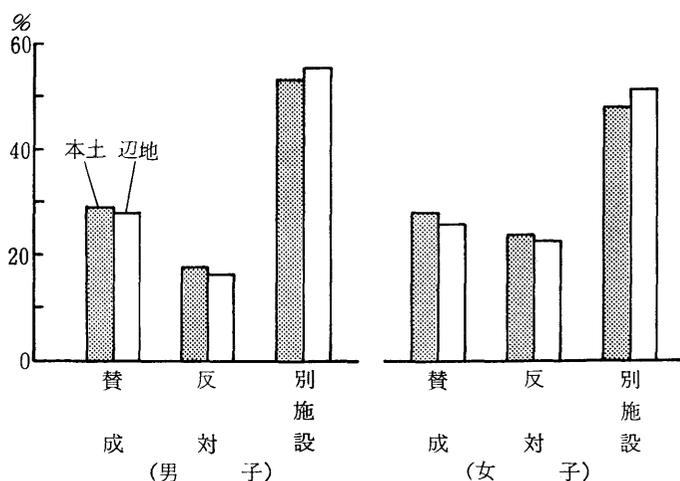


図14 学校体育施設の開校についての意見

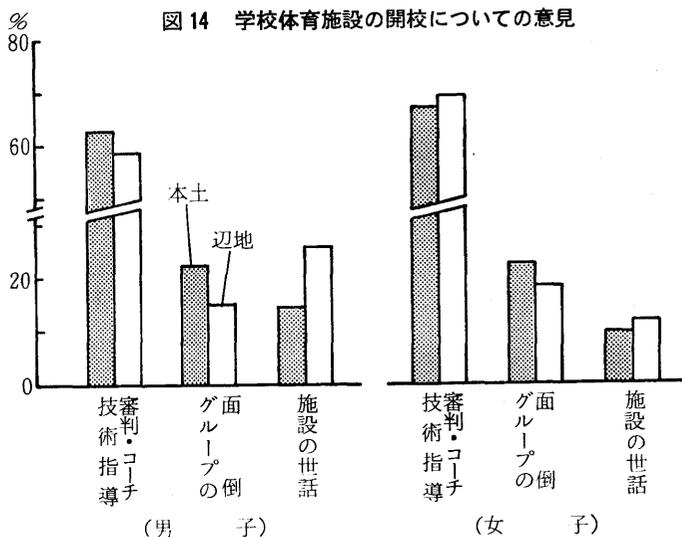


図15 どんな指導者を望むか

年団や婦人会、P.T.A.といった多目的集団での活動が中心に行われている。

次に内的条件については、スポーツに対する好意度、意欲、関心度が、本土よりも辺地の方で若干消極的あるいは無関心といった傾向がみられた。この傾向は、特に女子において強くあらわれているようである。

このようなスポーツを取り巻く社会的条件に関する本土、辺地の特徴が、それぞれの地域住民のスポーツをしない理由、すなわち本土では生活のゆとりがない（時間的）、辺地では人や家族の理解がないとか施設がないなど、に反映されているものと推察される。

ところで、神ら^{2,6)}、松永・神⁹⁾がすでに報告した地域差をみると、都市におけるスポーツの普及振興は他地域に比べて最も進んでおり、次いで近郊、農漁村の順であるといえる。一方、本研究結果では、農漁村の中でも本土におけるスポーツの普及振興が辺地に比べて進んでいるといえる。これらの知見からすると、都市、近郊、そして農漁村における本土、辺地の各地域は、スポーツの普及振興の進捗という同一次元上に並べられるように思われる。

外的条件についてみると、都市、近郊では「家の庭や周辺」・「学校以外の公共施設」や「商業施設」を利用して個人的レベルでの活動を行い、農漁村では「学校」・「家の庭や周辺」・「道路や空地」、低い率ではあるが「公民館」などで地区や部落単位、青年団や婦人会といった多目的集団での活動が中心であった。

内的条件についてみても、都市は近郊・農漁村に対し、また近郊は農漁村に比べてスポーツに対する好意度が高くなっているといえる。

以上のように、都市一（近郊）一農漁村の相対的傾向が農漁村地域の中の本土・辺地間にもみられ、本土は都市に、辺地は農漁村に対応した傾向を示していると考えられる。

このような考察に基づくならば、スポーツの普及振興政策の推進に当っては、以下のような点を十分に考慮する必要があるだろう。

確かに、現在までのスポーツの発展には目を見張るものがあり、大衆スポーツが普及していなかった段階では、従来の政策の進め方、たとえば、エリヤサービス（A.S.¹¹⁾としてはただ施設をつくること中心、クラブサービス（C.S.¹⁰⁾としては選手を育てること中心、プログラムサービス（P.S.¹¹⁾としては大会・行事の開催中心といった進め方、は当を得た方策として評価できるかも知れない。事実、都市化の進んだ地域では、このような政策の進め方でかなりの効果があったわけである。しかし、こういった都市を中心とするような発展過程をそのまま辺地へ当てはめることができるか否かについては、大いに課題の残るところである。スポーツの普及振興に当ってはその地域の社会的構造を十分に把握し、振興政策に取り入れる必要がある。すなわち、その地域や部落の生活組織が、日常的スポーツ活動を成立させる基盤となる¹²⁾ような取り入れ方をしなければならないであろう。

そのためのひとつの手がかりとして特に注目すべき点は、辺地のスポーツ活動が本土とは異なり、多目的集団の一員として行われている点である。島崎¹³⁾は、国民スポーツの発展を、〔国民スポーツの発展＝スポーツ参与・実践者の量的拡大×質的充実×時の経過（連続性）〕という式でとらえているが、量的拡大を図るのはもとより、それにもまして、日常生活を基盤とした質的充実を図ることが今後の対策として必要なことと考えられる。また連続性については、主に辺地にみられたような、大会・行事への義務的な順番による参加とか、機関関係者などの依頼による参加といった自主性のない一過性の側面を量的に強調しただけでは、内的な満足を得ようとするプレイとしてのスポーツ¹⁴⁾、底辺からの大衆的スポーツの継続的発展は望めないであろう。

Coakley¹⁵⁾が将来のスポーツの発展について指摘しているように、スポーツへの参加を広げる

ような機会の増大，たとえばここでは大会・行事などのスポーツ参加に関するプログラム，に対する地域住民の集団的対応の仕方を考える必要がある。

いずれにしても，本研究結果から推察すると，辺地におけるスポーツ活動に対する外的・内的条件整備は，本土に比較して立ち遅れの傾向にあるように思われる。辺地の社会的特性に即した外的条件整備を推進すると同時に，中島・上羅¹²⁾が述べているように，スポーツを他の生活要求と同一の次元に位置づけることをめざして，内的条件整備にも努力する必要がある。

引用文献

- 1) 神 文雄・犬飼義秀：スポーツ政策への一試論 ―スポーツ振興指定市町村制度の検討―，長崎大学教養部紀要（人文科学篇），20(2)，135-147，1980.
- 2) 神 文雄他：長崎県民の健康・スポーツに関する調査研究 ―とくに主婦のスポーツ活動について，長崎大学教養部紀要（自然科学篇），22(1)，49-70，1981.
- 3) 田原靖昭・菅原正志：長崎県民の健康・スポーツに関する調査研究 ―成人の個人的属性と健康の様相，長崎大学教養部紀要（自然科学篇），22(1)，71-90，1981.
- 4) 菅原正志・田原靖昭：長崎県民の健康・スポーツに関する調査研究 ―地域別にみた成人の健康の様相，長崎大学教養部紀要（自然科学篇），22(1)，91-102，1981.
- 5) 田井村明博・今中国泰：長崎県民の健康・スポーツに関する調査研究 ―成人の自覚症状からみた健康の因子分析的検討，長崎大学教養部紀要（自然科学篇），22(1)，115-122，1981.
- 6) 神 文雄・松永淳一：長崎県民の健康・スポーツに関する調査研究 ―とくに成人男子のスポーツ活動，長崎大学教養部紀要（自然科学篇），22(2)，189-213，1982.
- 7) 神 文雄・犬飼義秀：長崎県民の健康・スポーツに関する調査研究 ―成人のスポーツ活動における性差，長崎大学教養部紀要（自然科学篇），22(2)，215-222，1982.
- 8) 松永淳一・神 文雄：長崎県民の健康・スポーツに関する調査研究 ―成人の運動生活について―，長崎大学教育学部教科教育学研究報告，5，113-132，1982.
- 9) 今中国泰・田井村明博：長崎県民の健康・スポーツに関する調査研究 ―成人の病歴，自覚症状および生活状況における性差，長崎大学教養部紀要（自然科学篇），22(2)，223-234，1982.
- 10) 長崎県スポーツ振興審議会：長崎県体育・スポーツ普及振興に関する長期計画の策定について一答申―1977.
- 11) 宇土正彦：体育管理学，大修館書店，1970，pp.50-101.
- 12) 中島信博・上羅 広：地域社会におけるスポーツ ―香川県坂出市林田地区における事例研究―，体育社会学研究会（編），コミュニティ・スポーツの課題，道と書院，1975，pp.67-86.
- 13) 島崎 仁：国民スポーツの発展とスポーツクラブ，健康と体力，15(4)，5-8，1983.
- 14) Coakley, J. J. (影山 健他訳)：現代スポーツその神話と現実，道と書院，1982，pp. 11-16.
- 15) Coakley, J. J. (影山 健他訳)：現代スポーツその神話と現実，道と書院，1982，p. 300.